

# 私も育ててくれた北陸病害虫研究会

奈須田 和 彦

1. 原稿はメ切ってから この度平成13年12月31日メ切で北陸病害虫研究会報第50号に執筆を依頼されましたが、町の行事が重なったり、私ごともあって気に掛けながらも、遅れてしまい執筆を断念していました。ところが平成14年2月26日竹谷宏二会長から催促状を頂き、あわてて書いた始末でした。

かつて財団農業技術協会の「農業技術」に執筆を依頼された時もメ切に大きく遅れたことがありました。後日編集長から「大物は原稿メ切後から書く」と冷やかされ、今でもその言葉が忘れられません。決して大物ではないのですが、ルーズで悪い癖でこの大事な記念号に遅れ大変ご迷惑をおかけし本当に申し訳ありません。

2. 研究のヒントはどこにでも 私のライフワーク「殺菌剤がイネの生理およびいもち抵抗力増強に及ぼす影響」は農家の質問に「穂くびいもち病の防除適期はなぜ出穂直前がよいのか？」から生まれたものでした。それで無機成分の分析から始め、有機毒剤散布によってMn, Feが劇的に選択的吸収阻害を起こしたので、これがヒントと思い込み、迷路に入ってしまった。その後何年も模索していました。そんなある時当研究会や学会での懇親会で、無成分ばかりやっているが今後どう発展させるのかと言われました。その一言は眼から鱗が落ちる思いでした。それから抗菌性物質の生成やイネの生理面からアプローチすることができました。

研究のヒントや方向転換は常に試行錯誤し、そして常時考えていると身近なことがヒントになったことを今でも鮮明に思い出します。

3. 本誌は情報発信の場 私がこのテーマを本誌に投稿したことがきっかけで、私の研究を多くの人知っていました。また誰れそれはこんな研究をやっているということを知ってくれたことでした。まさに本研究会報は全国へ情報発信しているんだと実感し、本誌がそれに役立っているんだと痛感したものでした。

4. 研究の思い出あれこれ 研究での思い出はやはりいもち病と紋枯病の同時防除剤の先鞭をつけたことでした。両者の防除適期の違いや発生部位が異なることから、学会でもよく冷やかされましたが、農家の立場から考えるとよく似た時期に2度防除するより、例え効果が若干劣っても同時防除剤がよいと思い、実験をしてみると効果も全く劣らず、そんな多くの試験から自信を深め、その有効性を農林省に提言しましたが、仲々理解が得られませんでした。後年同時防除剤が主流的になったことを今でも喜んでいます。もう一つは「カメムシ類による斑点米の原因と防止対策」でした。福井県では一大プロジェクトチームを組み解明したのですが、プロジェクトの難しさとコーディネーターの重要性を実感したことでした。3つ目には保温折衷苗代でイネ苗立枯病が大発生した時です。原因は藻菌類と判明したのですが、当初農協営農指導員や普及員らとその見解が異なったことでした。農家にとってみれば指導の一元化は極めて大切なことで、指導する立場の意見が一致するまでは私としては現場で大変困却した思いが強く残っています。

5. あとがき 私を育ててくれたのは本研究会とくに北陸農試の小野小三郎先生や田村市太郎先生でした。こんなことを思うと今第一線で頑張っておられる皆さんに若き後輩のご指導をぜひお願いしたいと思っています。また当研究会から他の分野に変わった人達を暖かく迎えるこの土壌が本研究の発展にも繋がることを確信しています。当研究会および会員の皆さんのご発展を心から祈念し、本稿の責務とさせていただきます。

ありがとうございました。